

HIROSHIMA PIANO

被爆しても
ピアノの音色は
変わらなかつたのです

第38回日本映画復興奨励賞
第17回ロサンゼルス日本映画祭平和賞



おかあさんの 被爆ピアノ

佐野史郎 | 武藤十夢

森口瑠子 | 宮川一朗太 | 大桃美代子 | 南壽あさ子 | ポセイドン石川 | 谷川賢作 | 鎌滝えり

飯島晶子 | 城之内正明 | 沖正人 | 小池澄子 | 若井久美子 | 中山佳子 | 石原理衣 | 鈴木シアキ | 竹井梨乃 | 笹川柊音 | 原岡見伍 | 榎野幸知 | 内藤忠司
増井めぐみ | 田村依里奈 | クラーク記念国際高校の皆さん | 中原由貴 | 谷本惣一郎 | にかもとりか | 藤江潤士 | 大島久美子 | 森須奏絵

主題歌「時の環」南壽あさ子 | 音楽 谷川賢作 | 配給 新日本映画社 | 製作 映画「被爆ピアノ」製作委員会 | エグゼクティブプロデューサー 大橋節子・牛山大輔・集谷明 | ゼネラルプロデューサー 城之内景子
特別協力 矢川光則 | プロデューサー 佐藤斗吾 | 協力プロデューサー 小林良二・狩野善則・小竹克昌 | 撮影 藍河兼一 | 実景撮影 高岡賢治 | 美術 都谷京子 | 脚本協力 渡辺善則・黒沢久子
協力 広島フィルムコミッション・シネマキャパシティV.A.G.・呉信用金庫

協賛 映画「被爆ピアノ」を応援する会・学校法人創志学園・集谷造園・豆漿・ANDERSEN、錦町農産加工株式会社・松電通信株式会社・ロープCSネット・生協ひろしま・広島県生活協同組合連合会 | 後援 広島市・広島市教育委員会・広島県・広島県教育委員会
中国新聞社・中国放送・広島テレビ
広島ホームテレビ・テレビ新広島

x.com/hibakupiano

hibakupiano.com

監督・脚本 五藤利弘

おかあさんの被爆ピアノ



Introduction

昭和20年8月6日8時15分…

広島に投下された一発の原子爆弾。
街と共に一瞬にして消えたたくさんの命。

そうした壊滅的な状況の中で
奇跡的に焼け残ったピアノ。被爆ピアノ…
それを託された広島の調律師・矢川光則さんは、
修理・調律、自ら4トトラックを運転して
全国に被爆ピアノの音色を届けて回ること。

「80年経って被爆体験者は段々いなくなっていて、
あと10年したら殆どいなくなる。けれど、被爆ピアノ
は、その音色ですっと原爆のことを伝えていくこと
が出来る」と矢川さん。

被爆から80年を迎える今、
ピアノの音色で被爆の記憶を伝えていきます。



「世代を超えて伝えられるメッセージと調べ。
忘れてはいけない大切な想い。
沢山の若者たちに観てもらいたい、
心が優しくそして強くなる映画だ。」

プロスキーヤー
クラーク記念国際高等学校 校長
三浦雄一郎

被爆から80年

蘇った音色が語りかける



昭和20年8月6日に広島で被爆したピアノを持ち主から託された調律師・矢川光則(佐野史郎)。彼自身も被爆二世。

爆心地から3キロ以内で被爆したピアノは被爆ピアノと呼ばれる。
矢川は、現在数台の被爆ピアノを託され修理、調律して、それを自ら運転する4トトラックに載せて全国を回っている。

東京で生まれた江口菜々子(武藤十夢)は大学で幼児教育を学び幼稚園教師を目指しているものの将来について漠然としている。

被爆ピアノの一台を母・久美子(森口瑠子)が寄贈していたことを知った菜々子は、被爆ピアノコンサートに行き、矢川と出会う。矢川を通して被爆ピアノ、広島のことを考えるようになり、祖母のことを知るうちに自身のルーツ探しをしていく。

母・久美子はどうして広島から出て行ったのか？
祖母・千恵子が菜々子に伝えたかったことは？
調律師・矢川がなぜ被爆ピアノを伝える活動をしているのか？
菜々子はルーツを辿り、被爆ピアノの活動を辿りながら次第に何かを見つけていく…。

Story



戦後80年目。被爆から80年。自分を含めて今社会を担っている大人たちの殆どが戦後生まれになっています。戦争を知らない僕らは平和を当たり前のように享受してきました。しかし、当たり前だと思っていた平和は当たり前ではないことを数年の世界情勢の不安、国内で度重なり起こる災害などから強く感じるようになりました。今更ながら平和をとはずっと維持しようと思いつけていないと平和ではなくなってしまうのではないかと思うようになっていました。そのためには僕らが後進の若い人たちに語り継がなくてはならないと強く思うようになりました。そのきっかけは11年前に被爆ピアノのドキュメンタリー番組をつくらせて頂いたことでした。取材をさせて頂くうちに原爆が落とされたことや平和について考えるきっかけになるような映画をつくりたいと思いました。忘れたいこと、記憶し続けること、そして伝えていくこと、そうしたことを思い起こして頂くような映画になっていましたら本望です。(監督 五藤利弘)

